



## 第49回「おかねの作文」コンクール

# 十円玉三枚の重み

新潟県・新潟大学教育学部附属新潟中学校 3年 高橋 まりあ

私と母と妹は、毎年1～2回フリーマーケットに出店している。それは私が幼稚園の頃から続いている恒例行事の一つだ。売り物としては、妹が着られなくなった洋服や少しの贈答品、それと母が手作りしている粘土や布で作る雑貨類だ。一つ10円のものから高くても1,000円。儲けがほとんどないのも恒例だ。私が小学校低学年の頃は、お店屋さんごっこができるとわくわくしていた記憶しかないけれど、年を重ねていくうち、いつからかそのフリーマーケットを重荷に感じるようになっていた。

私たちの参加しているフリーマーケットは夏場が多かった。炎天下、必死に声を掛けてやっとの思いで足をとめてもらい、商品を手にとってもらうまでも大変な事なのに、それでも購入してくれない人が大半である。それに正直に言うとき大きな声を出す事はとても抵抗があった。それまではあまり気にもならなかったのに、小学校の高学年にもなると、知り合いに会ったら嫌だな……とか、古着を売る事に対しても何となく気が引けてしまい、大きな声を出す事が恥ずかしかった。そして何より、人見知りの性格の自分が、知らない人に声を掛ける事自体が大変な事だった。そんな様々な気持ちが増えていくフリーマーケットであったが、会場費などを差し引かれたらほとんど利益がないという事を知ったのも高学年の頃だった。

「また利益がほとんどなかったわ。」と楽しそうに話す母を見ながら私は理不尽な思いに駆られていた。利益がないのになぜ母はこんなに大変な思いをしてまでフリーマーケットに参加するんだろうと。

私が中学生にもなると部活に勉強にと忙しくなってきたため、フリーマーケットは今回限りでしばらくお休みする事になった。母はすんなり承諾してくれたが、最後のフリーマーケットに出す手作り品を一緒に作るようにと言われた。ハンドメイドに興味があったので、初めて母の雑貨作りの手伝いをする事になっ

たのだが、実際作り始めると想像していたのと全く違った。粘土細工はとても細かく、すぐ割れてしまうため、スピードが要求される。また布小物は針が指に刺さり痛いばかりでなかなか先へ進まない。元々手先の器用ではない私は一つ作り上げるのにかなりの時間を要した。傍<sup>はた</sup>から見てみると簡単そうに見えたのに、実際自分で作るとなるとこんなに大変なのかと改めて驚いた。と同時に、私は売るだけで大変と感じていた事に少し恥ずかしくなった。

そんな自身の初手作り品を持参して臨んだフリーマーケットはいつもと全く様子が違った。いつもどこかにあった気恥ずかしさも感じる事もなく、説明にも熱が入った。自分の作ったものを売りたい一心だった。必死に声を掛け、立ち止まってくれた人に説明したが、やはり、なかなか手に取ってもらうまでも至らない。順調に売れる母のものとはやはり違うのかな……と諦めかけていたら初めて手に取ってくれた人がいた。この時のドキドキした感情は今でも忘れられない。私は一生懸命説明し、自分が作ったものだ<sup>はた</sup>と伝えた。こんなに一生懸命、商品の説明をした事はなかった。するとその人は、笑顔で買ってくれ、10円玉を3枚くれた。私は胸がいっぱいになり、何回言ったか忘れてしまうほど「ありがとうございました。」と頭を下げていたと思う。30円なんだけど……私にとってはただの30円じゃなかった。初めて自分で稼いだという感動と買ってくれた人に対する感謝の重みを感じた。母はよく私たち姉妹に話していた。「1円も1万円も同じお金だよ。1円を頂く事ってとても大変な事だよね。」その言葉の意味が今なら理解できる。それまでの私は、お金を頂く事の大変さなど知ろうともせず、欲しい物があれば買ってもらっていた。もちろん、高い安いの判断はできたが、そんな価値観もその出来事から一変したと言っても過言ではない。

それ以降、私はフリーマーケットに参加する事はなくなったが、何かを購入するときは時間をかけて考えるようにしている。それが鉛筆1本にしてもだ。本当に必要なものか考える事を習慣にしている。周りにはケチと思われるかもしれないが、お金を大切にすることはずっと持ち続けていきたい。

あの時、30円の重みを知らなければ私は今でもお金の大切さを分からなかっただろう。母が夜遅くまで雑貨を作り、儲けのないフリーマーケットに参加していたのは、お金が欲しいからじゃなく、私たちに大切な事を教えるためだっ

たのかもしれない。

高校生になったら、また家族でフリーマーケットに参加して、もっともっと大切なものを学んでいきたい。

